2017／春

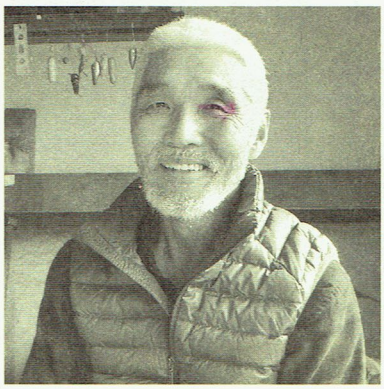
季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　三宅 賢三さん……1
ショップレポート　京都和とじ館……4
レポート　「越前生漉き鳥の子紙保存会」……4
和紙ミニコーナー……3
情報欄……2
頁

―越前和紙への提言―



■三宅 賢三（みやけ けんぞう）
1955年、兵庫県美方郡香美町生まれ。岡山大学農学部畜産学科畜産物利用学卒。金沢・二俣和紙の斎藤博氏に紙漉き・紙干しを師事後、京丹後市網野町の山間部に紙漉き工房を開設。牧場で働きながら、独学で様々な素材で紙を漉き、紙作品を制作。特に竹紙作りにおいては修復用竹紙を始め、長年の製法探求の記録を蓄積している竹紙の第一人者。

■三宅賢三さん（竹紙漉き職人）「竹紙に憑かれて三十年-和紙以前の紙を漉きたい」

●たっぷりある竹-竹紙事始め

大学時代に遊びで木版画をやっていて、刷る紙に興味が湧きました。ちょうど「田舎暮らし」とか「脱都会」という時代の雰囲気があり、沖縄や北海道でも暮らしました。三十才の頃、紙漉きをやろうと決心し、加賀奉書の斎藤さんに紙漉きと紙干しを教えていただきました。既に結婚して子供もいたので、早く独立して紙を漉きたい、あとは自分で勉強し、わからなければ誰かに聞けば良いと思い、場所を探していたところ、知り合った牧場のオーナーに「牛をみながら紙漉けばいい」と、この牛舎管理棟を自宅兼工房に提供していただきました。

最初は楮紙を覚え漉き始めましたが、野生の楮だけでは量的に少なく、産地のものを購入するしかありません。ところが、竹は周辺にたっぷりあり、雁皮は自生している、三椏は、かつて植えられたものが大木になり放置されていました。というわけで、必然的に楮以外、主に竹紙を漉くようになったのです。

●竹紙とはどういう紙か-製法と魅力

竹紙は中国では昔からよく製造され、製法は明時代末の産業技術書「天工開物」（一六三七）を始め、いくつか参考になるものがありますが、昔の日本では何故か作られておらず、現在でも作っている人は殆どいません。この辺りでは水上勉さんの「一滴文庫」で竹紙を作っていますが、製法も紙質も私のものとは全然違います。あちらは和紙風には漉かず、東南アジアのようにすくった紙を道具ごと干し、乾燥したらビリビリと剥がす。紙床には取っていきません。

楮などと違い、竹紙は同じ竹でも色合いも硬さも風合いも幅広く多様な紙が漉けるのが最大の特徴です。竹の成長段階のどの時期を原料に選ぶかで紙質が決まります。大まかに言うと、若ければ若いほど白く、チャラチャラとした音が出るガンピみたいな紙、枝が出てくる頃の竹は黄色い紙、成長した竹は茶色くなります。中国宋時代の竹紙「毛辺紙」（もうべんし）などは、柔らかく、木版文字の細い線もクリアに拾うので、印刷用としてもてはやされたようです。

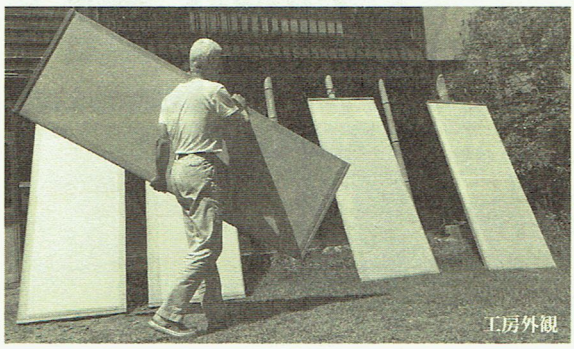
私は真竹や孟宗竹を使いますが、竹の種類はあまり問題ではありません。伐採した若竹は、まず節を落とし、青い表皮を削り取り（殺青-さっせい）、割り箸程度に細かく割ります。これをソーダ灰で八時間煮熟。冷めたら煮熟した灰汁ごと密閉容器に入れ、空気を遮断してなるべくPH10以上に保持、夏をまたいで発酵させます。極若い竹だと煮熟しただけで、握ると指の間から「にゅるっ」と出るくらいの柔らかさになり、すぐ漉くこともできます。中国の製法では原料を煮熟せず池に浸けて置くので、泥は被るし、大変臭くて虫が湧いたりします。私も最初の頃やってみたのですが、ウシガエルの卵やおたまじゃくしがドボドボと出てきた（笑）。手打ち叩解し、ネリはトロロアオイを使い、天日板干しです。竹の伐採時期、発酵期間と紙料の調整法、さらに紙質を詳細に記録し、技術の向上と、再現性を追求しています。その紙漉き記録は、一九八八年六月二日に最初の竹紙を漉いて以来、十九冊目になりました。

「殺青」した竹を割り、束ねて煮熟後、液ごと密閉し発酵熟成させる

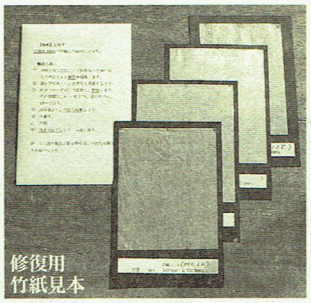
長年の紙漉き記録

●何でも紙に漉きたくなる病気

私の住んでいる京都府北部は「丹後ちりめん」の産地で、ちりめんの糸くずで絹百%の紙が出来ないものかと依頼され、研究を重ねたこともありました。キラが入っている二百三十年前の紙や、お寺の方が下さった江戸時代の名塩の間似合紙など、「こんな紙があったよ」と結構皆さんが持ってきて下さるので、インスピレーションの元になっています。紙漉きを始めると大抵は皆さん「何でも紙に漉きたくなる病気」になるのですが、私も今までに、絹に始まり、トマト、チガヤ、スゲ、



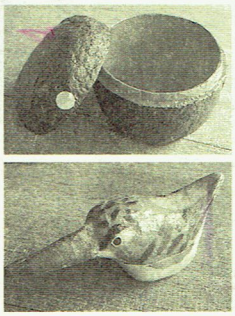
工房外観


修復用竹紙見本

ガジュマル、藤など、ありとあらゆる紙を漉きました。

現在、私の竹紙は「小津和紙」と「紙の温度」にはおろしていて、作品展も年に一回。紙の温度では宍倉佐敏先生監修の元、修復用に「三宅賢三の竹紙見本帳」を作り販売しています。数年前、日本には三枚しか残っていない隠れキリシタン「マリア十五玄義図」が竹紙に描かれているそうで、そのレプリカを作るための紙を製作する機会を得ました。日本では竹紙は作られていないので、どういう物語があったのか興味が湧きます。

私はもともと肩幅に入る大きさの紙が好きで、和紙以前の紙、つまり明治期に和紙という言葉ができた以前の紙（木灰煮熟、手打ち叩解、天日板干し）を漉きたいと思っているのです。わざわざ原料を取りに行くのはシャクで、どこでもあるものを使わないと面白くない（笑）。しかし、この辺りもイノシシとシカの害であれだけあった竹がなくなり、実は困っています。裏山の高天山にあるいろんな植物で紙を漉いて、「高天山植物図鑑」でも作ろうかと考えているところです。本当に紙漉きは面白い！竹紙は面白いです！



紙造形作品 右上 張貫の香合
右下 張り子の鳥 左 オブジェ

■「京都和とじ館」
編集力を生かし、特殊用途の和とじ本制作

「京都和とじ館」は、日本伝統の和綴じ本を、編集から製本まで一貫して作る和本制作工房で、有限会社オフィス・コシイシが運営している。十年ほど前、工房と店のあった京都市左京区の永観堂近くから、大津市に移ってきた。天智天皇大津宮遺跡近く、琵琶湖の見える高台の住宅地にある趣ある日本家屋の工房で、代表の興石豊伸氏にお話を伺う。

代表の興石豊伸さん

●出版社から始まった

興石さんは京都出身。大学では国文学を専攻し、古文漢文が得意だ。「琉球古典漢詩」に興味を持ち、復帰前の沖縄にもしげく通った。沖縄は古くから中国との交易があり、琉球漢詩は日本と中国の漢詩が混ざり合ったような独特の趣があり、江戸時代日本でも結構人気があったそうだ。また、各地の伝説や民話も集め、いつかは研究・収集したものを出版したいという思いがあった。十二年間沖縄に住んだ後、京都に戻り、予備校教師を経て、一九九一年、念願の出版社(有)オフィス・コシイシを設立。

「最初出した限定出版の高い本はそこそこ売れましたが、二冊目を出した頃から、大学の組織改革の影響もあり売れなくなりました。パソコンが得意だったので、古文漢文の参考書でも作ろうと電子ブックを開発しましたが、開発に費用がかかりすぎたのと、タイミングが少し早すぎたようです。」（笑）

今までに出版した本は「琉球古典漢詩シリーズ全二冊」（一九九七）、電子ブック「一日一章の論語」（二〇〇六）、「大呉服店から百貨店の誕生」（二〇〇九）など、硬派の本数冊。

二〇〇一年、趣味で絵を描いていた奥様の恵美子さんの絵を取り入れ、「おきなわ民話の旅」（初版）を和とじの本にして販売した。この本は思いの外好評で、雑誌「アエラ」でも紹介され、それを機に奥様と和綴じ本の出版社に挑戦することとなった。

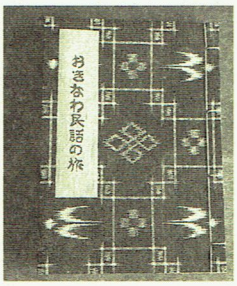
●私家本と寺社向け特殊用途

手の器用な「和本職人」の恵美子さんは、図書館に通い、展覧会に足を運び、独学で和綴じの技術を身につけた。一方、豊伸さんの方も高校の図書部時代には、古い和本を何度か修理したことがあり、基本的な作り方は知っていたという。

「和本のいいところは、一冊から作ることができ、西洋の本のようにそんなに特殊な技術や道具が要らないことです。江戸時代の庶民も、少し本が壊れると自分で直したものです。」

和本の世界には「私家版」「私家本」と称される出版の形態がある。江戸時代、いわゆる本屋仲間に入っていない所から出版された本は、流通経路で販売されることはなく、家や個人の伝承記録、伝えたい思いを編集して本にしたものだ。今でいう自費出版だが、和とじ館では、こういった特注の私家本を和綴じ本に仕立ててくれる。

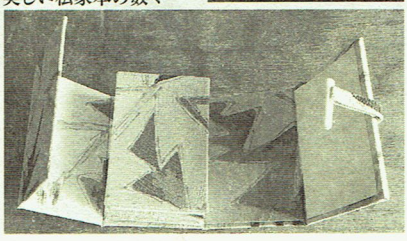
奥様の恵美子さん



例えば、ある年配の御婦人は半生を綴った自伝を、自分が着ていた着物生地を表紙にして、大和綴じの本に仕立ててもらった。個人の和歌集や俳句集、画集などの依頼も多く、落ち着いた文字レイアウトの本紙をオリジナルの表紙で仕立てる。あるアメリカ人の写真家は、自分の撮影したモノクロ写真を、自分が買い求めた千代紙の表紙で写真集を作った。ある大学教授は、家人の描いた絵を挿入して退官記念集を出した。普通の本なら、部数も多く、かなりの費用がかかるが、和綴じ本にすると単価は少し高くとも、必要な部数だけ制作でき、美しく、かけがえのない自分だけの一冊を作ることができる。因みに、料金はA5サイズ、三十ページの本で、一冊あたり三千円くらいが目安。

仏具屋経由で入る寺社の過去帳や朱印帳は、継続的に注文がある。古文書の解読も行う。最近

美しい私家本の数々



は弁護士や行政書士からの依頼で家系図の注文も多い。少し凝った大和綴じ装丁などにし、桐の箱に入れて収める。

●使われる和紙

興石さんが使う紙は、機械抄きの鳥の子紙を中心に常時二十種類ほど。京都の紙の卸店から仕入れる。最低全紙百枚単位で注文しなければならないが、希望のサイズに裁断してくれる。和とじ本の特異性を生かすため、機械に通りにくいが、手になじみやすく、めくりやすい薄手の和紙もよく使う。

「最初はどんな和紙がプリンターの機械に良いのかわからず、産地まで出向いたこともありました。和紙見本帳にある紙もいろいろ試してみましたが、印刷には鳥の子紙系統がよく、インクは顔料系が綺麗に印刷できます。今気に入っているのは土佐の機械抄き鳥の子紙で、薄・中・厚どれも使います。」湿っても乾くとピンと張りが戻るそうだ。純楮紙は機械に通りにくいので、耳を生かして表紙に使う。表具用の金襴緞子や友禅を使うことも多い。

和本作りの体験教室も随分行ったが、現在は人手がないので控え気味にしている。外国人も和本に大変興味があり、何日か滞在して指導してくれないかと工房を訪れたこともある。グローバルなニーズもまだまだありそうだ。

和綴じ本体験教室の模様
http://www.watojikan.com/

レポート

■「越前生漉き鳥の子紙保存会」活動近況と目指すところ

ユネスコ無形文化遺産登録を目指して、二〇一五年三月二七日に発足した「越前生漉き鳥の子紙保存会」（会長　柳瀬晴夫）は、この二年間、歴史や用途などの勉強会、製造・技法に関する研修会、原料のガンピの植樹・採取作業、関連展覧会・講演会など、様々な活動を行ってきた。今回はこの間の多岐にわたる保存会活動を辿ると共に、同会の産地における役割や目指すべき方向性について、お話を伺った。

●活動報告

ユネスコの無形文化遺産登録は、貴重な「無形」のわざを指定するもので「保存と伝承」が主目的。締約国が責任をもって、調査し、登録候補のリストを作り、登録された暁には必要な保護措置を関係者と共に取ることが義務付けられる。又、この登録には、まず国の無形文化財指定を受けることが前提となる。団体であれば、技術が途切れるリスクも減るため、団体での登録が望ましい。

越前和紙は歴史も古く、日本有数の和紙の産地である。人間国宝という個人の技術保持者はいるが、曲がりなりにも越前和紙自体が産業としてずっと成り立ってきたので、保存会のような団体はなかった。しかし、二〇一四年、「石州半紙」「本美濃紙」「細川紙」の三紙の登録を機に、和紙関係者だけでなく、行政、住民からユネスコ登録を望む声が多く上がった。それを受け同保存会が設立され、長期戦で登録を目指す活動を行っている。

二年間の活動は大きく分けて、

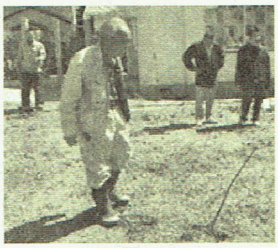
・原料のガンピの栽培に関するもの
・鳥の子紙の製法、技法に関する実施研修
・越前に豊富に残る古文書から鳥の子紙の歴史的価値についての探求
・広く一般の人に鳥の子紙を知ってもらう広報・講演・展覧会企画
・この地に多く残る江戸時代の鳥の子紙の繊維科学分析

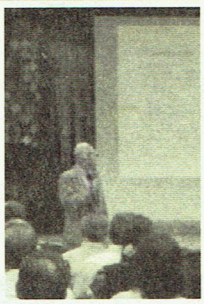
など、紙関係者のみならず、実技から文化・科学研究まで広く専門家、行政や住民も巻き込んだ活動となっている。

●保存会の目指すところ－産地総体として支える

まず、保存会の目指す紙漉き技術として、雁皮百％の生漉鳥の子を漉くための技術研修を行った。保存会会員同士が、紙漉き技術について話し合うこと自体、昔では考えられないこと

主な活動記録



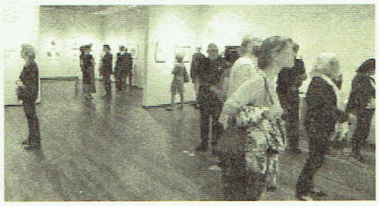


●2015年度

- 3月27日 …… 保存会設立
- 3月28日　鳥の子紙の原料となるガンピの苗を植樹
- 5月31日　越前和紙組合、越前生漉鳥の子紙保存会、総勢20名で敦賀の中村さんの山に入り、原料のガンピを採取
- 6月12日～9月20日　オランダ「レンブラントと越前和紙展」で「鳥の子」の紹介を行う
- 6月24日　第23回ロマン講座で、河野徳吉・石川満夫　鳥の子談義「鳥の子ってなあに？」開催
- 8月18日　本美濃紙保存会へ視察研修会
- 9月8日　技術継承事業が始動。木灰を使ってPH14のアルカリ溶液を使い雁皮12kgを煮る作業
- 9月10日～20日　雁皮の塵取り、叩解研修会
- 9月18日　雁皮の増殖法と栽培研修会　講師：今井三千穂
- 9月18日～.10月4日　鳥の子紙漉き研修会
- 10月2日～11月8日　福井県立美術館「レンブラント展」で鳥の子紹介
- 10月6日～7日　文化庁・福井県文化財保護審議会委員　現地調査　意見交換会
- 11月8日　雁皮の種採取
- 12月26日　福井県県教育委員会は、「越前鳥の子」を漉く技術を「県無形文化財（工芸技術）」に指定（実際の指定は27年1月12日）、当保存会は福井県指定の技術保持団体となる
- 1月19日～23日　小津和紙「版画の紙を極める～越前和紙が作り出す木版画とレンブラントの世界～」を開催

●2016年度

- 5月22日 …… ガンピ採取（敦賀の中村さんの山）
- 6月13,18,26日　鳥の子紙漉き研修　乾燥研修
- 6月13日　江戸時代の鳥の子紙実地研修会
- 10月20日　オランダ　レンブラントハウス美術館訪問　レンブラントも愛用した鳥の子についての意見交換
- 10月29日　原料の煮熟研修
- 11月　雁皮の塵取り
- 1月22日　鳥の子紙漉き研修　乾燥研修
- 2月25日～26日　越前生漉鳥の子紙調査の実施　於今立図書館。調査員に宍倉佐敏氏、日野楠雄氏、名児耶明氏、高木厚人氏の4名に依頼し、江戸時代の鳥の子の非破壊繊維分析とDMS撮影から考察する紙の漉かれ方などの評価作業を実施（約10点の調査を行う）
- 2月25日　ロマン講座「江戸時代の鳥の子-非破壊繊維分析からの考察」の講演会開催
- 2月26日　パピルス館「加飾紙の種類と時代」として、鳥の子を使った加飾紙についての研修会を実施
- 3月12日　雁皮の種まき研修　講師：今井三千穂
- 3月17日～18日　文化庁の現地調査及び意見交換会



二〇一五年十月
福井県立美術館
「レンブラント展」で
鳥の子紹介

であったが、産地内の意識も変わり、お互いの紙漉き技術を打ち明けながら、技術を統一することが出来た。様々な和紙の製法や製紙技術について話し合う機会が出来たことは、画期的なことであり、更なる品質向上に向けた研究や新技術の開発など、未来につながる期待が膨らんだ。

また、比較的若手中心の保存会の活動は、長年研究活動を続けてきた越前の長老達に支えられることも多い。年一回発行の「和紙の里」を三十七年間出し続けている「越前和紙を愛する会」の石川満夫さんは、この地に豊富にある文書などの文献研究、残っている古い和紙の材料・製法・技法の研究、技術的な考察に基づいた古い鳥の子紙の復元、未来に向けての材料の確保や栽培、これらの研究を土台としたこれからの新しい紙への模索に繋げることが重要と言う。でないと、ともするとユネスコ登録で知名度が上がり、観光客が増えても、産地の紙作り体制が引っ掻き回され、残さなければならない紙や技の伝承も危うくなるのでは、との懸念を抱いている。

「ひとくちに鳥の子と言っても、この産地には昔から様々なものがあり、実に多様です。昔の古い技術を常に研究し、それを土台として工夫を怠らない先人の態度があってこそ、現代まで生き伸びることができたのだと思います。ユネスコ登録はあくまで機会であって、それを媒介にして産地総体で、また業界全体で守り、残すという未来への戦略が必要です」と語った。

和紙ミニコーナー

■「和紙素材の研究展ⅠV」開催

去る二月二十一日～三月五日、愛知県豊田市美術館ギャラリーで開催されたこの作品展は、愛知県立芸術大学デザイン専攻　柴崎幸次研究室と豊田市和紙のふるさと（小原和紙）が共同で取り組んでいる和紙研究プログラムの成果をまとめたもので、今年で四回目となる。柴崎教授は、二〇〇七年から全国各地の和紙産地を学生と共に巡り、学内には和紙工房を設置。近代的な素材だけでなく、和紙という日本の伝統素材を学ぶことで、学生の作品作りに幅を持たせ、先人の技術や美意識、新しい技法の開発や表現、地域に貢献するものづくりなどを考えるきっかけにして欲しいと願っている。

会場には、小原和紙に尽力した図案家、藤井達吉に触発された作品の他、打紙した紙に印画した写真作品、アクリル画の下地剤を混ぜて半透明にした紙の額など、紙素材そのものへの新しい試み、古典技法の応用や新しい用途に挑戦したものなど、造形だけに留まらない学生・大学院生、卒業した作家、約四十名の幅広い作品が並んだ。

情報欄

●イベント情報

■神と紙のまつり（大掘り出し市）
時：2017年5月3日（水）～5日（金）
場所：和紙の里通り（越前市新在家町）
特設テント和紙販売、バザークラフト教室など

■大瀧神社・岡太神社春季祭礼
時：2017年5月3日（水）～5日（金）
場所：大瀧神社・岡太神社（越前市大滝町）

■紙の文化博物館
リニューアルオープン イベント
時：2017年5月4日（木）まで
場所：紙の文化博物館
内容：講演会・映画上映会・クラフト教室

■和紙青年部企画展×和紙展
時：2017年5月3日（水）～5日（金）
場所：卯立の工芸館（越前市新在家町）
※ お茶会も開催

■第37回　越前陶芸まつり
時：2017年5月27日（土）～29日（月）
場所：越前陶芸村（越前町小曾原）
即売、イベント多数

■第46回金沢ペーパーショー2017
時：2017年6月16日（金）～18日（日）
場所：石川県産業展示館　展示、体験あり

■第9回越前和紙
七夕吹き流しコンテスト（公募）のお知らせ
応募期間：2017年4月1日（土）～6月18日（日）
当日消印有効
詳細：事務局(0778-42-1363)又は
「越前和紙の里ホームページ」まで

●「紙の文化博物館」
リニューアルーアルオープン
4月8日（土）、越前和紙の里「紙の文化博物館」のリニューアルオープンした。4月から5月のゴールデンウィークにかけて、記録映画「越前和紙」の上映を始め、さまざまなイベントが行われる。詳細：「越前和紙の里ホームページ」まで
http://www.echizenwashi.jp/renewal/renewal_event.html

●第三回国際木版画会議、
ハワイで9月28日～10月1日開催
日本伝統の水性木版画は「Mokuhanga」として今や世界の共通語になってきた。2011年、京都・淡路、2014年、東京で開催された同会議は、今回初めて海外ハワイマウイ島での開催となる。
Mokuhanga普及に欠かせない和紙、彫刻刀などの材料・道具の展示販売も予定されている。
詳細：http://mokuhanga.jp/2017/jp/

編集後記
巻頭の三宅さんは、竹の一番内側に張り付いている「竹膜」を取り置いている。これが、彼の最初の紙漉きの目標だったそうだ。見せてくれた紙は、紙というより、全く「膜」だった。三宅さんの竹紙を見て、竹紙のイメージが全く変わった。（よ）

季刊・和紙だより 第54号（2017年春号）　発行日：2017年4月20日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人：福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所：有限会社新進堂印刷所（京都府宇治市）　用紙：機械漉き大礼紙（石川製紙株式会社製）
※無断での転写・転載はお断りします。